慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ロバート・コフーン著『レイモン・アロン』第一巻 歴史における哲学者 (一九〇五-一九五五年)・第二巻 社会における社会学者 (一九五五-一九八三年)
Sub Title	Robert Colquhoun, "Raymond Aron, Vol. 1, 2."
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1987
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.60, No.10 (1987. 10) ,p.139- 146
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19871028-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Robert Colquhoun

Raymond Aron, Vol. 1, 2.

Vol. 1, *The Philosopher in History* (*1905–1955*), pp. xi+540; Vol. 2, *The Sociologist in Society* (*1955–1983*), pp. xv+680; London, Sage Publications, 1986.

ロバート・コフーン 著

『レイモン・アロン』

第一巻　歴史における哲学者(一九〇五―一九五五年)

第二巻　社会における社会学者(一九五五―一九八三年)

レイモン・アロンの『回想録』に付された文献リストの末尾に、Un professeur anglais Robert-Francis Colquhoun qui a écrit une thèse, *Raymond Aron; an intellectual Portrait*, a mis an point la seule bibliographie scientifique qui existe. Elle-ci n'est pas publiée, mais accessible と記されていた。(1) 私はさほど気にとめることもなく、この度、同名の著者――Colquhoun という名はスコットランド＝アイルランド系であって、"Cohoon" と発音するのだそうである――の『レイモン・アロン』二巻本を手にして改めて右の記載を思い返した次第である。コフーンは、ロンドン大学にて社会学と哲学を学び、一九七九年から八〇年にかけてパリ社会科学研究学院に留学した。現在は、ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジの教育学部講師を務めている。彼はロンドン・スクール・オブ・エコノミックスで博士号を取得したが、その論文は *Raymond Aron; An Intellectual Biography, 1905–1955* である。勿論、私はこれを入手して読む機会はなかったが、これをもとに敷衍されたものが今回の著書第一巻に相当するものと推測される。本書の成るに当って、「最大の恩義」をこうむったのはアロン自身であった、とコフーンは述べている。アロンとのインターヴュ、度重なる邂逅、また書簡を通じて彼はアロンに親炙し、アロンの死後は、伝記的資料のためにシュザンヌ未亡人や令嬢ドミニック・シュペナーの協力と善意に助けられたという。先のアロンによる自叙伝とともに、コフーンのこの浩翰な二巻本は、最も完璧な伝記的記述であることは間違いない。

さらに本書には、少なくとも現在までのところ、アロンに関する最も正確、かつ網羅的な文献目録が付されている。書物の体裁をととのえた主要著作だけでも三十冊を上まわる。彼が定期的に寄稿した『自由フランス』『コンバ』『フィガロ』『レクスプレス』紙などの論評は四千から五千に及ぶといわれる。こ

こでは、その都度重要なジャーナリズム的論説や批評を含めて、その他の定期刊行物や学術雑誌に掲載されたものからおよそ七百点が収録されている。アロンの英訳本、彼自身が英語で書いた論文は第一巻に五十本、第二巻に二百本あまり、アロンに関するフランス語と英語の研究論文および書評の類いは、両巻あわせて重複する部分もあるが、全部で四百点以上に達する。これらの夥しい資料を駆使しつつ、コフーンは、アロンという哲学者の思索と活動の全容を描きだしている。本書のエピグラフのひとつに、「哲学を要約することは、常に哲学を裏切ることだ」(Résumer une philosophie, c'est toujours la trahir) というアロンの言葉が置かれているけれども、果たせるかなコフーンは読者を裏切らないであろう。その叙述的手法は、アロンの知的営みとしての作品を中心として、コフーンの解説的——彼個人の見解をまじえずに、アロンの言葉に即して客観的に——説明と理解が示され、つづいてそれら作品に対するフランス内外の多数の思想家たちによる賞讃と批判とが相呼応する、まさに論争的様相が、偏見をまじえることなく伝えられている。そうした意味において、冒頭に引いたアロンがコフーンの未刊の書を評した表現に倣えば、本書はじつに la seule biographie intellectuelle et scientifique と言いうるであろう。以下、その内容をごくかいつまんで紹介しておく。

第一巻は四部に分れている。第一部はアロンの生い立ちからエコール・ノルマールまで、アロンはレオン・ブランシュヴィックの薫陶のもとに、新カント派の影響を受ける。同僚に早熟なサルトルとニザンがいたことは、このうえない知的刺戟であったことはよく知られている。第二部は一九三〇年代で、アロン自身のいう《ドイツ巡礼》の時期である。折からナチスの擡頭を眼のあたりにして、ヨーロッパの危機と歴史のカタストロフを体験する。学問的にはドイツ社会学と歴史学を研究、とりわけ、ディルタイとウェーバーはアロンの思想形成に決定的な意味を持っている。ドイツにおいて体得したものが、彼の歴史認識の問題、歴史的客観性の限界を哲学的に反省する生涯の課題となる。それは、彼の博士論文『歴史哲学序論』(*Introduction à la philosophie de l'histoire*) および『現代ドイツにおける歴史理論に関するヒッセヒ』(*Essai sur la théorie de l'histoire dans l'Allemagne contemporaine*) として結実する。第三部は戦時中から戦後にかけて、一九四〇年のフランスの敗北、ロンドンへの亡命、「自由フランス」への参加、そして戦後フランスの再興へ、アロンの最も旺盛な活動の時期のひとつである。この間に、全体主義に対する関心が高まり、戦争と社会というテーマを思考しはじめる。と同時に、彼のリベラリズムへの明晰な態度が表明される。第四部は冷戦の時期で、アロンは一九四〇年六月『フィガロ』紙に参加し、以来三〇年間国際政治とフランスの内政問題に健筆を揮う。コフーンが挙げている一例をひけば、アロンが "rideau de fer" という表現を用いたのは、『ポワン・ド・ヴュー』紙の一九四五年七月二十二日と九月二

十三日の論説においてであって、チャーチルのフルトン演説における“iron curtain”（一九四六年三月）に先んずること六ヶ月前であった。

ジャーナリストとしてのアロンの資質は、しばしばアメリカのウォルター・リップマンと比較される。だが後者の知識が皮相なものにとどまり、その歴史的判断がいつも誤っていたのに対して、ジャーナリストにこそ歴史哲学が不可欠であることを強調したアロンのリップマンに対する評価こそ、コフーンはアロンみずからに相応しき言葉であるという。例えば、『偉いなる分裂』（*Le Grand Schisme*）にせよ、『戦争の連鎖反応』（*Les Guerres en chatne*）にせよ、現代世界の意味への洞察と解釈には、アロンの歴史哲学が潜んでおり、あるいはその具体的例証であることを閑却すべきではない。同様のことは、かの有名な『知識人の阿片』（*L'Opium des intellectuels*）についても言える。通常、この書はアロンのイデオロギー批判の代表的なものとみなされているが、むしろその第二部「歴史の偶像崇拝」において、歴史哲学に基礎をおくアロンの態度が鮮明に示唆されている。歴史的世界に合理性がないというのではなく、究極的な意味把握は人間にとって不可能であるということ、それは「認識の限界と現実の複合性」によるのであって、われわれの理解の無能力によるのではない。アロンにとっては、「イデオロギーの終焉」よりも「歴史の意味」についての歴史哲学的テーマの方が一層重要なのである。『歴史哲学序論』『戦争の連鎖反応』『知識人の阿片』が哲学的・方法論的テーゼの首尾一貫した「三部作」を形づくっていると言うべきだ、という見解をコフーンは正当に評価している。

第二巻はソルボンヌ時代（第一部）とコレジュ・ド・フランス時代（第二部）より構成されている。一九五五—六八年の十三年間は、アルジェリア戦争の開始から五月革命の勃発まで、そして第四共和国から第五共和国へと変転するゴーリズムの時代である。アロンは同調主義者ではなく、けっしてゴーリストであったことはない。アロンの論調は、つねに右翼からも左翼からも攻撃を受けた。一九五八年『不変と変化』（*Immuable et changeable*）が出版されたとき、『フィガロ』の同僚がその「慎重かつ明白な文体」をたたえ、政治あるいは経済のあらゆる重要問題を議論できる現代フランスの唯一の著述家とアロンを評するとともに、彼の秘密がその記憶力と精神の機敏さにあり、また彼の生活と仕事における「並はずれた自己規律」にある、と確信していると述べているが、彼の生きた肖像をよく伝えている。しかも、こうした時事的問題とのかかわりは、この時期のアロンにとっては第二義的なものであった。一九五五年にソルボンヌ大学の社会学教授に就任、彼は年次ごとに異なるテーマで講義した。講義内容は書き改められて、その後ほとんどが書物として公刊された。コフーンが「ソルボンヌ三部作」と呼んでいる『産業社会に関する十八講』（*Dix-huit Leçons sur la société industrielle*—五五—六年度）、『階級闘争』（*La Lutte des classes*—

五六―七年度）、『デモクラシーと全体主義』（*Democratie et totalitarisme* ―五七―八年度）をはじめ、『国家間の平和と戦争』（*Paix et guerre entre les nations* ―五八―九年度、その第二部は五九―六〇年度）、『社会学的思考の諸段階』（*Les Etapes de la pensée sociologique* ―第一巻は五九―六〇年度、第二巻は六一―二年度）、『大論争』（*Le Grand Débat* ―六二―三年度）等がそれである。

社会学者としてのアロンは、社会の反覆的現象を折出し、一般的範疇によってそれらを解釈し、究極的には法則を発見することを意図する。その場合に社会学者は、さまざまな社会構造を比較し、各集団内部における社会現象を分類して、より一般的なシステムのなかに社会的多様性を位置づける。ウェーバーを引照してアロンが書いているように、社会学者は、経済的、政治的、法的な諸範疇を設定して、それら多様な現実を歴史的発展のなかで把え、さらに社会の総体を再構成して解釈しなくてはならない。ここで彼が定義づける社会学とは、科学的・個別的な調査研究のそれではなく、やはりドイツ的学問背景に負うものであり、それとともに、彼はフランス社会学の伝統をモンテスキューに認めていることも見逃してはならない。さらに、コント、トクヴィル、マルクスといった十九世紀思想家がとりあげられるのも、彼らが〈新しきもの〉に対する歴史認識をそなえた社会学の「創始者」であったからである。《産業社会》《デモクラシー社会》《資本主義社会》――彼らの価値と歴史観はそれぞれ相違していたにもかかわらず、彼らはまさに同時代人であった。そして彼らの直面した問題はまた、現代のわれわれの問題でもある。

アロンは三人の思想的遺産を継承しながら、コリン・クラーク、ジャン・フーラスティエ、ロストウの経済成長の理論を採用して、フランスにおける「発展」理論の先鞭をつけた。西欧社会における資本主義は、そのプロメテウス的動態性に支えられて、複雑な成層化を遂げ変貌してきた。他方で社会主義は、計画経済、権力、イデオロギーにおいてまったく異質なタイプの社会に属するとはいえ、経済発展という局面においては、産業社会として理解することができよう。だが、現代世界の傾向は、発展途上国をも含めて、全体的ヴィジョンの体系的定式化によって裁断することは不可能である。コフーンは、アロンの解決すべき問題の困難さを明確に指摘している。歴史の普遍化をたとえ信じることができたとしても、《体制》が単線的発展段階をたどるとはかぎらず、ましてや科学的・技術的合理性が「道徳的・人間的進歩」と対応するわけではない。アロンは、アンティ・イデオロギーの基本的立場に変りないとしても、「イデオロギーの終焉」について再検討する必要に迫られ、「イデーの再生」を慫慂するゆえんである。(2) 翻って彼が「パリの知識人たち」を追放すべく厳しく糾弾するのも、彼らが産業社会というものの社会的・経済的現実をあまりにも無視しているからである。*marxismes imaginaires*――アルチュセルの通時的な、構造主義的概念は特殊的・具体的現実となんら関係をもっ

ておらず、サルトルの対自的意識の実存主義的マルクス主義の知は、経済学に対してまったく無知である。

左翼、プロレタリアート、革命の神話がつきまとうラディカルな思想に対するアロンの批判は、『序論』以来の歴史的世界に対する彼の批判的な問いかけと密接に関連している。サルトルの『弁証法的理性批判』は、一九六〇年にあらわれた。アロンは、アバディーン大学でのグリフォード講義（一九六五年と六七年度）のテーマに選んだ「歴史意識の思想と行動」の準備のために『批判』を再読し、その間に、ソルボンヌでのまる一年の講座を『批判』のためにさいている。この難解な、恐るべき書は、要するに、「単一の歴史」の理解可能性(intelligibilité)を究極目的とする、全体性の歴史哲学の提示にほかならない。かかる歴史意識はいかなる条件のもとに可能なのか、その「真理」の基礎、もしくは限界はどのようにして論証されうるか。個人的意識＝実践（プラクシス）による歴史の「全体化」というサルトルの弁証法的理性は、結局は、集合態的救済へと導き、テロルと暴力の哲学へと転形する、とアロンは論じる。コフーンによれば、アロンはこのグリフォード講義のテーマを反省しつづけ、暴力に関する一書の出版を予定していた。それは、「暴力のロマン主義」と「暴力の合理性」との二つの部分から成るはずであったが、その企画は放棄されて、それぞれ『歴史と暴力の弁証法』(*Histoire et dialectique de la violence*) と『クラウゼヴィッツ』(*Penser la guerre, Clausewitz*) となった。アロンの思考のなかでは、これら二つのテーマは照応していたので、けっして別箇に着想されたのではない。コフーンがサルトルとクラウゼヴィッツを相次いで論じている理由もまた明らかであろう。

アロンがプロイセンの軍事理論家の思想に取り組んだのは、一九七〇年代のはじめであった。コフーンは次のように書いている。「それは、コレジュ・ド・フランスの七十歳の老教授が、四十年の歳月を経た後、遽かに新しい博士論文の提出を決意したかのようであった。そのような決意に彼を導いたものは何であったか」と。アロンが『戦争論』(*Vom Kriege*) に接したのはベルリン時代に遡り、若い歴史家ヘルベルト・ロジンスキーとの友情によるというが、それを最初に読んだのは一九五五年、フランス語訳が出た頃であり、彼は核時代の政治的・戦略的問題に関心を寄せるようになってからである。一九七一―二年度のコレジュ・ド・フランスの講義においてクラウゼヴィッツを論じた際、彼は深く研究する必要性を痛感し、書物にまとめるべく努力した。クラウゼヴィッツの政治哲学がアロンの心を捉えたのはなぜか。それは、彼が戦争における人間的なもの、または歴史における行動に透徹した思考をめぐらしていたからであり、つまり歴史変動、運命の偶然性、人間の情念に余地を残す「実践」の理論を探究したからであった。『クラウゼヴィッツ』はアロンの傑作であり、彼自身の評価によれば、「おそらく最良の書」である。『フィガロ』に掲載されたホフマンの書評が引用されているが、アロンとクラウゼヴィッツには「精神

的関連性」が窺える。すなわち、イデオロギー的な歴史哲学の拒絶、思想と行動との関係、政治の優位性についてであり、両者ともに「モンテスキューの後裔」である、と。

コレジュ・ド・フランス時代の部分には、国内政治としては、アロンとジスカール・デスタンの選挙、『フィガロ』から『レクスプレス』への移籍、一九八一年の大統領選挙、アロンとトッドとの対立や編集部の内紛、さらに「新哲学派（アーボー・フィロソフ）」や「新右翼」に対するアロンの距離を保った見解など。国際関係としては、イスラエルとレバノンの問題、イラン革命、アフガニスタン問題、サッチャーとレーガン外交等々、アロンの衰えを知らぬ知的活動が細大洩らさず記述されている。今これらについて言及する余裕はないが、各専門分野の研究者は、アロンの目撃をとおしてフランスの政治状況を考察することができようし、それぞれの問題関心にしたがって適切な項目をみいだせるであろう。それゆえに、本書全体が、さながら Encyclopédie aronienne――コフーンはこのような言葉を使用しているわけではないが――であるといってよい。

ところが、彼の頭脳労働にひとつの空隙をつくったのは、一九七七年四月に彼を襲った卒中の発作であった。しばし言葉も語れなくなった彼は、鉛筆と紙のサインを示して、「死を怖れず」(Mourir pas peur) と覚束ない左手で書きしるしたという。それ以後、彼は「死への現前」(Dasein zum Tode)――とドイツ語で記しているが――を感じながら、やり残した仕事のなかで、みずからの過去を書きとめようと決断する。[3] 一九七九年の夏から書き綴られて四年有余、「政治的省察の五十年」は七五〇頁に及ぶ大作となって、八三年九月十日に出版された――アロンの死はそれから五週間後のことであった。アロンへの追悼文のなかで、コフーンが「卓越した作品」と称しているジョージ・スタイナーの「理性の遺言」と題する文章の一部を訳出しておく。

……アロンの死は、現代フランスの感性の歴史のなかに、きわめて意識的かつ自己意識的な一瞬を刻みつけたように思われる。代表的なマンダラン、イデオローグ、政治的＝哲学的言説と論争のヴィルテュオーゾ――カミュ、マルロー、メルロ＝ポンティ、サルトル、シモーヌ・ド・ボーヴォワール、レヴィ＝ストロース、ラカン、そしてアロン自身が――精神生活を活気づけ、支配したひとつの時代は終ったのだ。……今や maître à penser は誰ひとり残っていない。至高な精神指導者たちは逝ってしまった。

レイモン・アロンの死がこの深く感じられた内省の機縁となったこと、彼の死からかくも広汎な、象徴的な喪失感が生じたということは逆説的である。アロンは、けっして右翼にとっても左翼にとっても、評判のよい人間ではなかった。アルジェリア戦争の最中、一九六八年の困難のさなか、また『フィガロ』との劇的な決裂ののち――アロンの立場が気難しい、腹立たしくさえある孤立状態に思えたこともしばしばであった。

……

これらの回想は、まさにその呪縛からの解放、みずからの資質と影響力に対して抑制を強い、冷静に議論する態度によって、アロン

をしておそらくフランスにおけるモンテスキューとド・トクヴィルの、そしてヨーロッパの伝統におけるマックス・ウェーバーの唯一の真正な継承者たらしめているのである。

確かに、ウェーバーの影像はアロンの影像と重なり合い、彼のなかで新たに展開されていった。コフーンが指摘するように、アロンは哲学者ウェーバーを実存哲学的に解釈していた。官僚的・合理的傾向の進行する近代社会における人間は、それでもなお責任と行動と信念とによって、おのれの現実を乗り超えなければならない。今日的に言えばアンガジュマンによってである。アロンが残したもう一つの伝記には、*Le Spectateur engagé*[4]という標題が付されている。spectateur であると同時に acteur であること、これはフランスにおけるアンガジュマンの世代に属する知識人に共通の倫理的立場であって、ここにあえてウェーバー的な意味を読み込む必要はないとしても、アロンの心底にあるものを看過すべきではない。コフーンは右の書から次の言葉を引用して、第二巻を結んでいる。「……ただ世界は変化し、私のもろもろの意見は現実に適応してきただけです。私は、さまざまな状況のなかで、さまざまな行動によって、つねに同一の価値に尽くそうと試みてきました。私は自己自身に、私の思想に、私の価値に、私の哲学に忠実であったと思っています。政治的意見を持つということは、きっぱりとひとつのイデオロギーを持つことではありません。それは、変化する状況のなかで正しい決断をすることです。私はたびたび過ちを犯さなかったと言いたくはありません。しかし、私はみずからの価値と若き日の憧憬とを裏切ったことはありませんでした。」今や、「アロンとともに正しくあるより、サルトルとともに間違っている方がましだ」と考えるような時代は過ぎ去ったのである。

最後に附言しておきたいが、私が「レイモン・アロン小論—ひとりの反イデオロギー的イデオローグ—」を書いたのはすでに十年以上前のことである。[5]当時、私は意識的にアロンの思想的立場をK・ポパーの歴史主義批判にひきつけて理解しようと試みた。勿論、それが誤解であったわけではなく、アロン自身も度たびポパーに言及していたし、コフーンもまた、社会改革に関しては、アロンが「ポパー的な言葉」によって、イデオローグの野望ではなく、「合理主義の精神」と合致した「社会工学者」の接近方法のために論じていることを肯定している。しかしながら現在、私はドイツの Geisteswissenschaften——、フランス語の sciences morales に当る[6]——のコンテクストにおいて、アロンを読み返す必要性を感じている。その際に、コフーンの本書はもとよりのこと、一九八五年二月の『コメンテール』[7]誌アロン記念特集号の諸論文も大いに役立つであろう。さらに、コフーンと並んで注目すべきもう一人のアロン研究者に、フランシスチェク・ドラウスがいる。彼は、その論文「レイモン・アロンの思想における自由の弁証法」[8]において、ドイツの

歴史的思惟をアロンの根底に鋭く読み取っている。また彼によって編集されたアロン著作集『歴史・真理・自由』[9]の序論において、アロンの思想のなかに「歴史的人間の悲劇的弁証法」を、そしてアロンとウェーバーの親近性を認めている。これらを念頭に置いて、前掲論文を書き改めることが私の今後の課題である。

(1) Raymond Aron, *Mémoires: 50ans de réflexion politique*, Paris, Julliard, 1983, p. 759.

(2) レイモン・アロンは、ダニエル・ベルとともに、人口に膾炙した「イデオロギーの終焉」論者、あるいは《体制》の収斂論者とみなされがちであるが、それがいかに単純化された歪曲であるかは、*Trois Essais sur l'âge industriel*, Paris, Plon, 1966 中の第三エッセイ "Fin des ideologies, renaissance des idées" をみれば一目瞭然である。

(3) アロンは、あたかも書いている自我を客体化しているかのような調子である。「回想」を書こうと決意してから、それを書いている今の時点までたどりついて、彼はこう記している（コフーンの引用箇所を原文で示しておく）。"Non par volonté consciente mais spontanément, abandonné à lui-même, je aspirais à evoquer mon passe," (*Mémoires*, p. 689.)

(4) この書は、一九八一年の夏、アロンの生涯と思想についてのテレビ番組において、ジャン＝ルイ・ミシカとドミニック・ヴォルトンとの対話を放送と同時に活字化したものである。（なお、本書は、慶應義塾大学の平林正司氏らによって翻訳され、『参加する目撃者』として近日中に刊行予定であることを付記しておく。）

(5) 『法学研究』第四十八巻第一号（一九七五年）二六―四六頁参照。

(6) Raymond Aron, *La Philosophie critique de l'histoire: Essai sur une théorie allemande de l'histoire*, Paris, Vrin, p. 38.

(7) "Raymond Aron, (1905-1983): Histoire et Politique," *Commentaire*, Février, 1985, Vol, 8, no. 28-29, Julliard.

(8) Franciszek Draus, "La Dialectique de la liberté dans la pensée de Raymond Aron," *Revue européenne des sciences sociales*, Tome XXI-N°66, 1983 (Librare Droz, Genève), pp. 143-184. コフーンによれば、ドラウスがパリ社会科学研究学院に提出した博士論文は、*La Philosophie sociale de Raymond Aron* である。

(9) Franciszek Draus, "Introduction," to *History, Truth, Liberty; Selected Writings of Raymond Aron*, Chicago and London, The University of Chicago Press, 1985, pp. 31-33.

奈良和重